平成３年度厚生省心身障害者研究
「小児慢性疾患のトータルケアーに関する研究」

新生児剖検心の冠動脈起始部の形態的特徴

武 村 民 子

要約：新生児冠動脈起始部の血管構築上の特徴を明らかにするために，在胎２３週から４２週で出生した２０例の新生児剖検心の冠動脈を観察した。新生児冠動脈は中膜は非薄で，豊富な外膜を有し，１２例に内膜の限局的肥厚がみられた。川崎病にみられる冠動脈瘤形成には乳幼児期の冠動脈の血管構築上の特殊性が関与している可能性がある。

見出し語：新生児，剖検心，冠動脈，川崎病

【目的と対象・方法】

川崎病に特徴的な冠動脈起始部の動脈瘤形成が乳幼児期の冠動脈の構造上の特殊性に基づいているかどうかを明らかにするため，在胎２３週から４２週で出生し，生後０日から４ケ月間生存した心血管奇形をもたない２０例の新生児剖検心を用い，冠動脈起始部の横断標本を作成し，ＥＶＧ染色を施こして観察した。

【結果】

新生児冠動脈は成人例に比較して中膜は非薄で，外膜は厚く中膜外層から外膜にかけて浮腫性である。在胎２３～３０週出生児の冠動脈では内膜はほとんど形成されていない。２０例中１２例に内膜の限局性肥厚を認めたが，在胎３０週以前が３例で９例はすべて在胎３５週以降の出生児であった。限局性内膜肥厚の部分は浮腫性で少数の平滑筋を認め内弾性板が疎解し３～４層となっている。

【考察】

川崎病における冠動脈炎の初期病変は中膜外層から外膜の炎症性浮腫と炎症細胞浸潤であり，動脈瘤形成は中膜構成成分の破綻によるものと考えられる。新生児冠動脈の構築上の特殊性ー非薄な中膜，豊富な外膜，内膜の局所的肥厚は川崎病冠動脈病変の発現過程と深く関連しているといえよう。

日本赤十字社医療センター中央検査部病理：Department of Pathology, Japanese Red Cross Medical Center)

検索用テキスト OCR(光学的文字認識)ソフト使用
論文の一部ですが、認識率の関係で誤字が含まれる場合があります

要約:新生児冠動脈起始部の血管構築上の特徴を明らかにするために,在胎 23 週から 42 週で出生した 20 例の新生児剖検心の冠動脈を観察した。新生児冠動脈は中膜は非薄で,豊富な外膜を有し,12 例に内膜の限局的肥厚がみられた。川崎病にみられる冠動脈瘤形成には乳幼児期の冠動脈の血管構築上の特殊性が関与している可能性がある。